

市民ニーズ等現況分析プロジェクト

プロジェクトチーム活動報告

令和7年12月26日(金)

1. プロジェクトの活動概要

プロジェクトの活動概要

- 当プロジェクトは、以下の設置目的/活動領域のもと発足し、「(仮称)調布市スマートシティビジョン」策定との連動も見据え、活動期間を令和7年12月末と設定。本日の報告をもって、当プロジェクトの活動は終了する

設置目的/活動領域

設置目的: 調布のまちの現状をWell-being指標から分析し、今後の調布スマートシティ協議会の活動を検討
活動領域: 上記分析を起点とした今後の調布スマートシティ協議会の活動につながる示唆出し

活動期間

令和7年12月末まで

- 「(仮称)調布市スマートシティビジョン」策定の動きと連動を図るため

活動履歴

9/10 第1回キックオフミーティング実施以降、計6回のミーティングを開催

10/8 一般社団法人スマートシティ・インスティテュート
(以下、SCI-J) へのご相談

12/4 第1回 ワークショップ実施 (講師:多田アドバイザー)

- 宿題:Well-being指標アンケート調査結果の分析

12/12 第2回 ワークショップ実施 (講師:多田アドバイザー)

- ここまでの議論における疑問点や今後の進め方について、SCI-J へ相談

- 総務省地方公共団体の経営・財務マネジメント強化事業アドバイザー(多田アドバイザー)の支援・助言を得ながら、プロジェクト活動を推進

2-1. 主な活動内容

- 第1回ワークショップ
- 第2回ワークショップ

第1回ワークショップ

実施日

12/4(木) 15:30~17:30 @アフラックスクエア

目的

- 企業・教育機関・自治体・市民が互いの立場を理解しながら、「三方良し」の状況を実現するために重要なポイントを学ぶ

内容

「コレクティブインパクトゲーム」を活用したゲーミフィケーション

参加者 (敬称略)

- プロジェクトメンバー

メンバーの 気づき

- 価値観の異なる多様な主体が、共通目標に向けて価値創出を最大化させるには、**相互理解が必要**であり、お互いの目標や強み、他者への期待をオープンにして、**本音ベースで議論をすることが重要**であると感じた

コレクティブインパクトゲーム
《金沢工業大学・東京海上日動火災保険(株)・
(株)LODU・(一社)SCI-Japan》

地域幸福度指標(LWC
指標=Well-being指
標)を用いて、街の強み
や弱みを特定し、企業・
教育機関・自治体・市民
が連携しながら、ウェル
ビーイングな街の実現
を目指すゲーム



第2回ワークショップ

実施日 12/12(金) 13:00~17:00 @アフラックスクエア

目的

- 市民の幸福感(Well-being)向上には、どんな調布市の未来が創られると良いか。その理由・価値・必要な行動について、検討・議論するプロセスを体験する

内容

- ビジョンフレーム作成
- 産学官民がそれぞれの立場から何ができるかを考える

参加者
(敬称略)

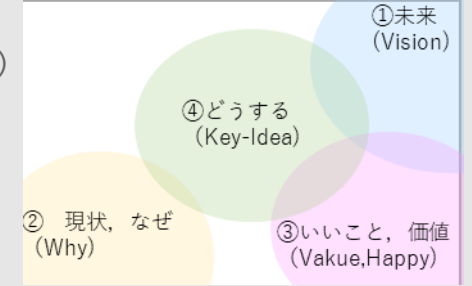
- プロジェクトメンバー

メンバーの
気づき

- 第1回ワークショップと同様の気づき。また、左記の議論を円滑に進めるために、スマートシティの見識がある中立的なファシリテーターの存在も重要であると感じた
- 市民の幸福感(Well-being)を原点に議論をした結果、スマートシティの実現には壮大なデジタル施策よりも、アナログで小さな取り組みの積み重ねで達成しうるので感じた(P.34 Appendix③ 参照)。また、これらの取り組みは、お互いの強みの掛け合わせにより価値が増大することを実感した

ビジョンフレーム 《鵜川 洋明氏》

- ①未来 (Vision)
- ②現状, なぜ (Why)
- ③いいこと, 価値 (Value, happy)
- ④どうする (Key-Idea)



2-2. 主な活動内容

- Well-being指標アンケート調査の分析結果

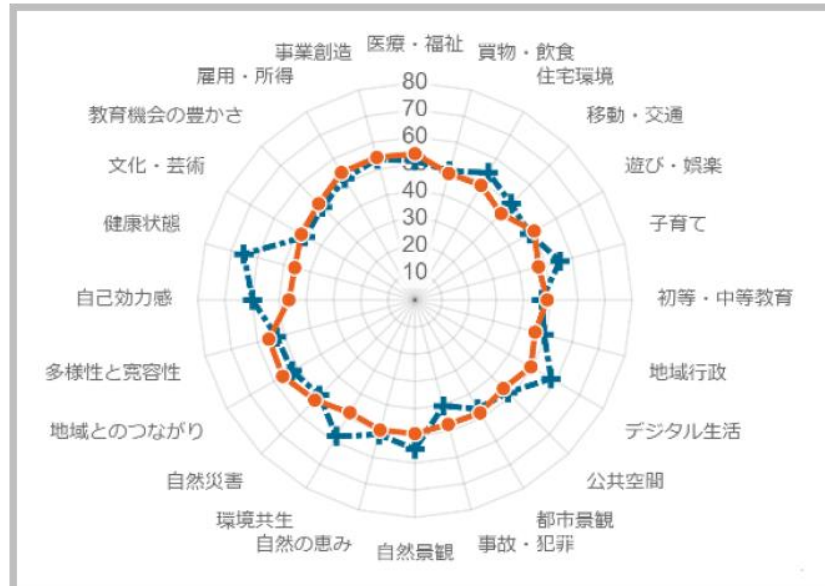
Well-Being / Well-Being指標とは

Well-Being

- 簡単に言うと「**健やかで、孤独ではなく、成長実感を感じられる**」状態のこと ⇒ 多面的に「良い状態」を差す
- 価値観の変遷によって、「物質的・経済的豊かさ」だけでなく「**心の豊かさ**」も重要視
⇒ Well-Beingの向上を目指す世界的な動き

Well-being指標

- 市民のWell-beingをどう実現すべきか？ ⇒ 指標化(EBPM)を試みたもの
- 地域における幸福度・生活満足度を計る4つの設問と、3つの因子群(生活環境, 地域の人間関係, 自分らしい生き方)から構成され, **因子群は合計24のカテゴリーに細分化**
- 24のカテゴリー毎に, **主観指標はアンケート設問, 客観指標は KPI**を設定し, それぞれのデータを偏差値化



橙色 = 主観指標, 水色 = 客観指標

カテゴリー名称		
生活環境 (16)		地域の人間関係 (2)
<都市環境>	デジタル生活	地域とのつながり
医療・福祉	公共空間	多様性と寛容性
買物・飲食	都市景観	自分らしい生き方 (6)
住宅環境	事故・犯罪	自己効力感
移動・交通	<自然環境>	健康状態
遊び・娯楽	自然景観	文化・芸術
子育て	自然の恵み	教育機会の豊かさ
初等・中等教育	環境共生	雇用・所得
地域行政	自然災害	事業創造

Well-Being指標アンケート調査の分析結果

アンケート概要

- 実施期間: 令和7年7月18日～8月31日
- 設問数: 全51問
- 回答数: 349名

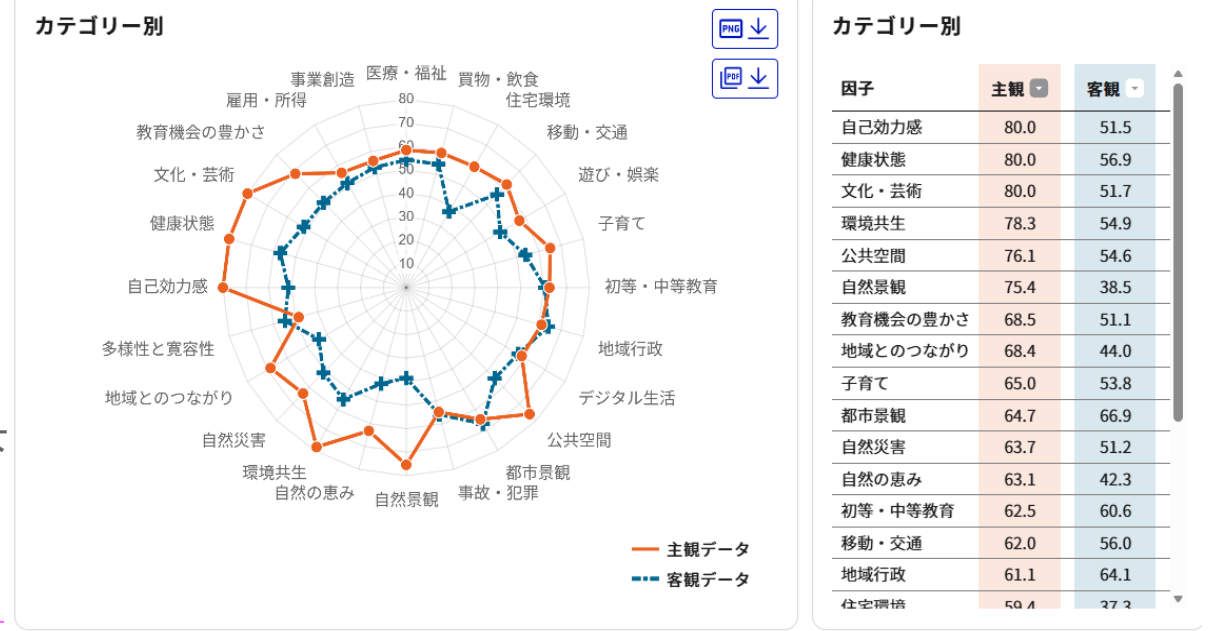
ダッシュボードから見えること

- 調布市は全体的に主観指標が高い(平均偏差値:64.9)。中でも「自己効力感」、「健康状態」、「文化・芸術」は主観指標が80.0と最大値であり、**市民の幸福感は既に高いのでは？**
- 客観指標は基準値(50.0)を上回るが、主観指標が基準値を下回る項目(「多様性と寛容性」)や、客観・主観指標ともに基準値を上回るものの、相対的に主観指標が低い項目(「事故・犯罪」「事業創造」、「雇用・所得」等)については、**潜在的な環境は整っているが、市民に認知されていない可能性があるのでは？**

アンケート分析から得たメンバーの気づき

- Well-being指標は、「暮らしやすさ」と「幸福感」を市民の視点から数値化・可視化するための共通指標として有効**だと感じた
- 一方、主観指標と客観指標におけるデータの裏側の理解によって、調布市の実態に即した活用が必要であると感じた
- 例①:主観指標→調布市の「医療・福祉」は2つの設問だけで市民の「暮らしやすさ」と「幸福感」を本当に測ることができる？
- 例②:客観指標→「自然景観」のKPIは、「国立・国定公園の有無」が含まれているため、数値を上げるのは物理的に困難では？
- 主観指標と客観指標の高低や差分など表面的な数値だけに振り回されず、それぞれの**データの裏側を理解したうえで、議論を重ね、取舍選択・カスタマイズしながら自走することが重要**だと感じた

デジタル庁のダッシュボードに反映後の調布市の結果



2-3. 主な活動内容

- 外部の有識者(SCI-J / 多田アドバイザー)へのご相談と助言

SCI-J / 多田アドバイザーへのご相談と助言

- プロジェクト活動において、SCI-Jや多田アドバイザーにもご相談を行い、今後の協議会の活動に向けて、以下の助言を得た

SCI-J からの助言

スマートシティの成功事例はほぼゼロ。課題よりソリューションが先行し、市民の声が無関係という状況が続いている

多くの自治体で「技術導入ありき」で進めてしまい、住民ニーズや課題設定が置き去りになっている現状。スマートシティは本来、生活者の視点で課題を解決することが目的である

Well-being指標を分析・活用するには正しい理解が必要

知見の少ないプロジェクトメンバーだけでの指標分析・活用は困難。まずは協議会メンバー全員がWell-being指標を正しく理解できることが理想であり、その手段として、OASISなどの研修プログラムの活用は有効

調布市におけるスマートシティの方向性は整理途上であり、目的や組織体制の明確化が今後の課題

調布市はスマートシティを進める意欲はあるものの、庁内や協議会での役割分担や目的の共有が、不十分な印象。今後は体制整備と方向性の明確化が重要では？

多田アドバイザーからの助言

スマートシティの究極目標は、市民の幸福感(Well-being)を高めること

日本のスマートシティはテクノロジーの話が先にきてしまい、生活者視点が抜け落ちている(目的と手段が逆)。調布市でも「なぜスマートシティを進めるのか」の共通理解が必要

Well-being指標は共通目標などの方向性を揃えるために機能するツールであり、その裏の構造を理解しておくことは重要

Well-being指標は方向性を揃えるために重要な指標であるが、まずは指標の構造を正しく理解し、地域特性に合わせた自分達の解釈による、取捨選択やカスタマイズが必要

「腹を割って話す」ことが産学官民連携の第一歩

「自分達は何がしたいのか」「そのために自分達には何ができるのか」「周囲に何を協力してほしいのか」を共有し、互いが互いの目的の達成に向け協力することが重要

PTの受け止め



スマートシティの取り組みには「**市民視点**」が重要である



「**Well-being指標**」の正しい理解と活用は有効な手段である



協議会メンバーの**相互理解**による「**チームビルディング**」が重要である

3. プロジェクト活動を通じた気づき(まとめ)と得られた示唆

プロジェクト活動を通じた気づき(まとめ)と得られた示唆

- これまでのプロジェクト活動を通じた気づきから、得られた示唆は以下の2点である

第1回・2回 ワークショップ

- 価値観の異なる多様な主体が、共通目標に向けて価値創出を最大化させるには、**相互理解が必要**であり、お互いの目標や強み、他者への期待をオープンにして、**本音ベースで議論をすることが重要**であると感じた
- 上記の議論を円滑に進めるために、スマートシティの見識がある**中立的なファシリテーターの存在も重要**であると感じた
- 市民の幸福感(Well-being)を原点に議論をした結果、**スマートシティの実現には壮大なデジタル施策よりも、アナログで小さな取り組みの積み重ねで達成しうると感じた(P.34 Appendix③ 参照)**。また、これらの取り組みは、お互いの強みの掛け合わせにより価値が増大することを実感した

Well-being アンケート 分析結果

- **Well-being指標は、「暮らしやすさ」と「幸福感」を市民の視点から数値化・可視化するための共通指標として有効**だと感じた
- 一方、主観指標と客観指標におけるデータの裏側の理解によって、調布市の実態に即した活用が必要であると感じた
例①:主観指標→調布市の「医療・福祉」は2つの設問だけで市民の「暮らしやすさ」と「幸福感」を本当に測ることができる？
例②:客観指標→「自然景観」のKPIは、「国立・国定公園の有無」が含まれているため、数値を上げるのは物理的に困難では？
- 主観指標と客観指標の高低や差分など表面的な数値だけに振り回されず、それぞれの**データの裏側を理解したうえで、議論を重ね、取捨選択・カスタマイズしながら自走することが重要**だと感じた

有識者からの 助言

- スマートシティの取り組みには**「市民視点」**が重要である
- **「Well-being指標」の正しい理解と活用**は有効な手段である
- 協議会メンバーの**相互理解による「チームビルディング」**が重要である

1. スマートシティの取り組みには**「市民視点」**が重要
そのためには、**「Well-being指標」**の理解・活用が有効
2. 産学官民連携の価値を最大化するには、
相互理解による**「チームビルディング」**が必要

4. プロジェクトチームから協議会へのご提案

1. Well-being指標を活用しませんか？

Well-Being指標アンケート調査の継続実施

2. もっと「腹を割って」みませんか？

チームビルディング・協議会体制の検討

1. Well-Being指標を活用しませんか？

提案理由

- スマートシティの取り組みには、テクノロジーあり気のソリューション先行ではなく、まずは「市民視点」が重要である
- そのためには、市民の視点から「暮らしやすさ」と「幸福感(Well-being)」を数値化・可視化するための共通指標となるWell-Being指標の活用が有効であり、市民の幸福感(Well-being)の現状を捉えるためには、指標の正しい理解が必要である

具体策

- ① 協議会を主体としたWell-Being指標アンケート調査の継続実施
- ② Well-Being指標における協議会メンバー全員の理解醸成を目的とした研修・ワークショップ等の受講
(南雲氏が推奨するOASISプログラムは、受講料が高額であるため、具体的手法は要検討)

検討課題

- ① 継続実施する場合の調査方法、費用等
- ② 研修・ワークショップの内容・講師、受講に係る費用等

2. もっと「腹を割って」みませんか？

提案理由

- 価値観の異なる多様な主体が、共通目標に向けて価値創出を最大化させるには、相互理解が必要であり、お互いの目標や強み、他者への期待をオープンにして、本音ベースで議論をすることが重要である
- また、上記の議論を円滑に進めるために、スマートシティの見識がある中立的なファシリテーターの存在も重要である
- これらを通じて、相互理解による「チームビルディング」がなされれば、調布市スマートシティ協議会そのものが、各メンバーにとって、より意義あるものになる

具体策

- ① 協議会メンバーが「腹を割って話す」場の設定
- ② 上記の議論を円滑に進めるためにスマートシティの見識がある中立的なファシリテーターの配置

検討課題

- ① 「腹を割って話す」ための協議会全体の体制や会議手法等
- ② スマートシティの見識がある中立的なファシリテーターの配置に係る費用等

◆ Appendix①

- 11/12 調布スマートシティ協議会幹事会 中間報告資料

市民ニーズ等現況分析プロジェクト

プロジェクトチーム活動報告

令和7年11月12日(水)

設置目的

調布のまちの現状をWell-being指標から分析し、今後の調布スマートシティ協議会の活動を検討

活動領域

～8月31日

Well-Being指標調査実施

回答数 349人(調布市民のみ) 395人(調布市民以外も含む)

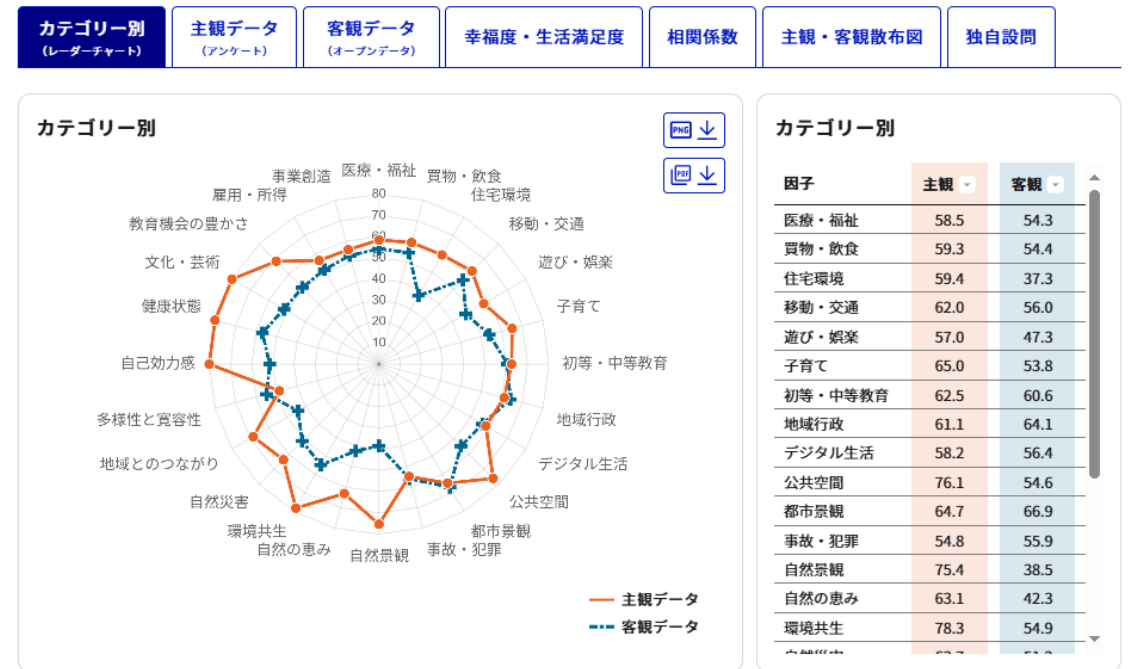
10月上旬

調査結果をダッシュボードに反映

<https://well-being.digital.go.jp/>

プロジェクトチーム
の活動領域

今後の調布市スマートシティ協議会の活動につながる示唆



計5回のミーティングを開催し、プロジェクトチームの設置目的を踏まえた活動期間やアウトプットなどについて議論, 整理

- 9/10 第1回キックオフミーティング
- 9/25 第2回ミーティング
- 10/7 第3回ミーティング
- 10/8 一般社団法人スマートシティ・インスティテュート (以下, SCI-J) へのご相談
- 10/17 【調布市主催】Well-Being指標活用勉強会
- 10/24 第4回ミーティング
- 10/31 第5回ミーティング(多田アドバイザー交えて議論)
- 11/12 調布スマートシティ協議会 全体ミーティング

- 活動期間, アウトプットイメージについての議論
- Well-Beingについての認識の共有 (Well-Being指標とは?分析方法?)

- ここまでの議論における疑問点や今後の進め方について, SCI-Jへ相談

- アウトプットに向けた方針を整理(調整中)

今後の活動予定について

これまでのプロジェクトチーム内の議論を踏まえ、今後の活動は以下のように決定

活動期間

令和7年12月末まで

- ・「(仮称)調布市スマートシティビジョン」策定(令和8年1月頃から着手予定)の動きと連動を図るため

アウトプットイメージ(目標)

以下2点を、令和7年12月下旬開催予定(日程調整中)の調布スマートシティ協議会全体会議にて報告

1. Well-Beingアンケートの分析結果(プロジェクトメンバー各々の視点で見た「調布のまちの実態」について)
2. 上記や以下のワークショップ受講を踏まえた今後の協議会活動につながる示唆(以降は、協議会全体で協議)

実施内容・スケジュール

総務省「地方公共団体の経営・財務マネジメント強化事業」を活用し、計2回のワークショップを実施

現在、12月末までのアウトプットに向けてスケジュールを調整中

	候補日	時間	目的(案)	内容(案)
第1回	12/4(木)	1~2時間	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査結果の分析をより効果的なものにするため、Well-Being指標についての理解を深める 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲーム形式の実践研修
第2回	12/12(金)	4時間	<ul style="list-style-type: none"> ・ Well-Being調査結果から見える調布のまちの実態について考える ・ まちの見え方の差について考える ・ これまでのプロジェクト活動を踏まえ、協議会に還元できる示唆は何か、とりまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダッシュボードから調布市の特長を読み取る ・ SWOT分析結果をもとに、プロジェクトメンバー各々が8つの注力分野を選定。各々の選定の違いについて考察 ・ プロジェクトメンバー間の意見交換, すり合わせ

◆ Appendix②

- 第1回・第2回ワークショップ後の参加メンバーの感想

参加メンバー の感想 (原文ママ)

- 企業, 大学(教育機関), 行政, 市民 それぞれに重要視する価値観が異なる中で, 連携による効果を最大化させるには, 価値観(実現したいこと)やできること(どんな技術, ノウハウ, データを持っているのか), やってほしいことなど(どんなデータ, ノウハウが欲しいか)を互いに見せ合いながら議論することが重要だと感じた
- コレクティブカードを通じ, 各ステークホルダーごとに視点の範囲が異なることを絵図により視覚的に実感した
- 同じテーマでもアプローチや解釈が異なることは, 新しい発想や視野を広げるきっかけになると感じた。
- 協議会の活動もこのようなグループディスカッションを通じて, 普段の会話では得られないアイデアや価値観が引き出されるのではないかと感じた
- それぞれの組織が何を得意とするか, 何ができるのか, を共有することが連携では重要
- 同じ方向性の大目標で一致していても, それぞれの立場によって目指すところが異なることを認識し, 共有することが大事と感じた
- 行政, 企業, 大学, 市民など, 異なる団体同士が一つの集合体として, 価値創出を高めていくためには, それぞれの前提条件や獲得目標などを, 各団体がしっかり議論し, お互いに理解しておくことが重要である

参加メンバー の感想 (原文ママ)

- Well-being指標を使って街の実態を Well-Beingの視点から調布のまちの現状を見て課題を探求した結果、新しい視点での課題が見え、解決策(案)について深い議論ができた。住民のWell-Beingの向上のためにはスマートシティやデジタル技術を活用した壮大なプロジェクトではなく、アナログで小さい、多様な「win」をつなぎ合わせてインパクトを出す(コレクティブインパクト)ようなプロジェクトの積み重ねが重要なものかもしれない
- 「アナログで小さく、多様な取り組み」は、PDCAを回しながら継続的に実施していくことが求められるものが多い。参加企業や行政の立場において、そのような取組が十分に理解され、正式に位置づけられるのかという点は課題
- LWC指標等データはあくまでも、一つの視点であり見方やデータの設定の仕方により変わる。だからこそ、市民に対して「こうでありたい」を皆で議論することで、お互いの理解が深まり、具体的連携アイデアを創出できると感じた(1回目同様)
- このような議論をすることで直データ基盤やデジタルの活用につながることはない。この後具体的取組が生まれた結果、手段としてデータ基盤やソリューションにつながる。民間企業としてはここまでの時間を縮めたいと感じた
- 協議会へ「チームビルディング=お互いを知る」ということ及びファシリテータの重要性をメッセージとして伝えたい
- ホワイトボードを用い、立った状態で意見交換を行う形式であったことから、広い会議室で机を挟んで行う協議では得がたい率直かつ活発な意見交換がなされた。SC協議会においても、価値観や問題意識を共有するうえでは、同様の手法が有効である可能性がある
- こんなことができるとよい、という具体的な項目があると、それぞれの組織で貢献できそうなアイデアが挙がり議論が進む。
- 個々の組織では高いバリアと思っていたことが他の組織で比較的簡単に解決できるなど、議論で連携による可能性が見えてくると感じた
- 「調布のありたい街」を議論した結果、求めているのは、デジタルを駆使した壮大なものではなく、意外アナログで単純なことだということが分かった。そのうえで、WS内で「自組織のリソース・強み」、「他組織への期待」について話し合った結果、各団体でできることを掛け合わせてみると、より実現に近づくヒントが得られることを実感した
- 同時に、今まで、他団体のことを知っているようで知らないことも多かったのだと気づき、協議会においても、それぞれの団体が「何を成し遂げたいのか?」「そのために自組織でどんなことができるか?」「他組織に何を期待するのか?」などを、まずは腹を割って議論することが必要であり、結果として、各組織の価値を高め、市民の幸福度向上に繋がるのだと実感した
- 分析することで、調布の街の特徴が分かると同時に、そのデータの裏側の構造を理解することができた。異なる組織間において、Well-being指標という共通の指標をもつことは良いことだが、Well-being指標だけに振り回されず、データの裏側の理解したうえで、議論を重ね、取捨選択&カスタマイズしながら、自走していくことが重要だと改めて感じた

◆ Appendix③

- 第2回ワークショップで作成したビジョンフレーム

【参考】参加メンバーが作成したビジョン・フレーム(青字:WSで出た意見をキーワードごとに集約したもの)

ビジョン・フレーム

- **子ども・教育**
子どもの将来が心配
体験・経験を増やしたい
- **日常の移動・安全**
日々の移動が安心・安全であることが大切
- **孤立への危機感**
人間関係が希薄 | つながりが感じられない
- **高齢化への対応**
全世代が活躍できる仕組みが必要

②現状、なぜ (Why)
なぜそのようにしたいのでしょうか？

 Asumachi Lab © 2025 株式会社あすまちらぼ. All rights reserved.

④どうする (Key-Idea)
ビジョンを実現させるための
鍵となる行動は何でしょう？

- 5つの戦略的テーマ
- ①子ども・若者
体験・経験プログラム
インクルーシブな学び
 - ②場づくり
拠点整備 | 歩きやすさ・安全
 - ③情報・データ
情報連携・デジタル化 | 行政×民間連携
 - ④活動支援
個人活動発信 | 創業者応援
 - ⑤コミュニティ
顔が見える関係 | 参加しやすさ工夫

①未来 (Vision)
どんな調布市にしたいですか？

- **空間・都市構造**
歩きやすい・安心な街 | 駅前・公共空間の活用
- **多世代交流**
若者・創業者が活躍 | 高齢者も含めた全世代参加
- **大学×地域連携**
大学との連携による地域活性化
- **個人の活動**
個人の挑戦・創業者が応援される



- **個人の幸福感**
自分が活躍できる喜び | 誇りを持って生活
- **つながり・関係性**
顔が見える関係 | 孤立しない安心感
- **家族・世代間**
家族で過ごす時間 | 世代を超えた交流
- **参加・貢献の実感**
地域に貢献している実感 | 参加しやすい環境

③いいこと、価値 (Value, Happy)
そのビジョンが実現したらどんないいことがありますか？

参加メンバー
の気づき

市民の幸福感(Well-being)を原点に議論をした結果、**スマートシティの実現には壮大なデジタル施策よりも、アナログで小さな取り組みの積み重ねで達成しうるのだと感じた**